

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 28 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H01310

研究課題名(和文) テロワールによって捉える土地と文化の新たな領域史の構築

研究課題名(英文) Fabrication /Making of a New Territorial History of land and culture on apprehending of "terroir"

研究代表者

中川 理 (NAKAGAWA, OSAMU)

神戸女子大学・家政学部・客員教授

研究者番号：60212081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 34,380,000円

研究成果の概要(和文)：本研究成果において、第1には、フランスで形成された「テロワール」概念の本質とその変化を歴史的に整理・解明できたとともに、テロワールは土壌や自然環境だけではなく、集団的知見や流通形態、消費文化、都市による評価、価値付けといった人的要素が大きく関わるという現代的意義を明確化することができた。第2に、具体的な現地調査の結果、テロワールはワインだけでなく、アジアの茶業においても同等に見出すことができることを明らかにした。第3にテロワール概念は、小さな区画のみならず、産地の大きなスケールにも適応できるものであり、消費都市や国際的評価によっても照射する土地・領域が変わることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

消費地としての都市の周辺に広がる農地の価値付け＝テロワールを明らかにしようとする本研究は、近年盛んとなった都市史研究において、分析対象を都市に限定するのではなく、その周囲の領域も包摂して捉える領域史研究に発展させようとする新たな研究動向において、重要な意味を持つものである。そして、テロワール概念が一般的に知られるようになった土地の地味や環境だけを指すのではなく、流通や政治的背景などの歴史にも深く規定されるものであり、そのため都市周辺の農産地が持つ独立した土地の価値や意義を持ち得ることを明らかにしたことは、地域社会の再生を必要とする地域政策・農村政策において大きく役立つものとなるはずである。

研究成果の概要(英文)：The results of this research can be summarized in three parts. First, we were able to historically organize and clarify the essence and changes in the concept of "terroir" formed in France, as well as clarify the contemporary significance of the fact that terroir involves not only soil and natural environment, but also human factors such as collective knowledge, distribution patterns, consumer culture, urban evaluation, and value placement. Second, specific field research revealed that terroir can be found not only in wine, but equally in the Asian tea industry. Third, it became clear that the terroir concept can be applied not only to small parcels of land, but also to larger scales of production areas, and that the land-area to be irradiated changes depending on the consuming city and international reputation.

研究分野：都市史

キーワード：都市史 領域史 テロワール 食産品

### 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、災害や地域経済の不均衡という現代社会に対峙し、土地と文化の関係を真摯に捉える上で、都市と農村を領域史的枠組みから捉えることの急務を指摘し、人間と自然環境とが形成してきた「テロワール」をキーワードに検討するものである。なぜなら、テロワール概念を通じて、既存の都市史研究が踏み込んで来なかった空間＝文化構造を解明し、領域史的という新たな視野から地域や国家の文化的領域を再定義することができると考えられるからである。

(2)「テロワール」とは、ワイン生産に関する用語のひとつで、地質、地形、日照、微気候などの自然環境に対応して人間が作り出したぶどう生育の風土的特徴を意味する。それは土地に対する人間の集団的知見が集積された地理的空間であると同時に、テロワールに価値を与えてきたのが消費する都市であるという事実は、テロワールが領域的広がり of 物的特性と質的特性を表象する文化的総体であることを示している。製品の交換を行う「市」の存在が都市の条件であるならば、生産物と地理的空間との連関を意識させ、製品の価値付けを通じて地域に重層する文化構造を読み解くことは、都市の本質に関わる問題であり、テロワールは都市を読み解く上でも重要な学術的、社会的意義をもつものといえる。

### 2. 研究の目的

(1)本研究は、「テロワール」概念を通じて、土地の文化的価値の歴史的検証を可能にするために、食文化が土地に刻みつけてきた多面的な歴史を、国内外の都市を比較分析しながら実証的に解析することを目的とする。これは、都市史学に求められる、土地に根ざした新たな領域史研究の構築を目指すものである。土地の風土的特徴と価値評価を表す「テロワール」をキーワードに据え、都市史学を軸に地理学、歴史学、経済史学との分野横断的な研究体制を構築し、従来の歴史研究に地理情報を定量的に分析する手法も加え、多面的な領域史を土地＝文化構造として解明することを目的とする。都市と農村が時間的、空間的なつらなりのなかにあるという領域史的視野のなかで、食が作りだした文化構造を空間的に解明することを目的としたものである。

(2)具体的にはヨーロッパのワイン、アジアの茶を対象に、それぞれの産地形成および各生産拠点について詳しく調査分析を実施することで、研究目的を果たすことが目指される。分野横断的に領域形成を考察するために、地理学的な広範囲から都市史、建築史という大小の空間スケールを往復しつつ、歴史学、経済史の観点から、地域、空間、流通社会の形成について史料分析等から詳細を解明することが目的である。特にフランス・サンテミリオンにおける生産拠点シャトー・クーテットを調査対象に据え、具体的なケーススタディを行うとともに、アジアの茶として宇治茶、台湾茶に関する現地調査を詳細に実施することで、食が作り出した文化的空間構造を解明していくことを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1)本研究は、テロワールと空間、テロワールと流通、テロワールと文化という三つの柱を念頭に置き、比較研究のケーススタディを行うために現地調査を展開していった。調査は共同研究者および研究協力者により、分野横断的に多角的に実行された。

2017年度は6月に京都・西京エリアの筭調査、9月にシャンパーニュ、ブルゴーニュ実見調査をへて、2018年2月にシンポジウム「テロワールと空間」実施し、ワイン土壌研究者である坂本雄一氏を招聘し活発な意見交換を行うことで分析の視角を進化させた。初年度はワインの

テロワールの基礎調査として位置付けることができ、同時に日本の産品にテロワールを見出す試みとしての筍、竹の調査研究を展開した。

2018年度には7月に日本中世史の食文化の一つとして「庭訓往来」を読み解く研究会を実施した上で、8月にボルドー、シャンパーニュの現地調査を実施した。ボルドーでは広域的な調査とともに、今後のケーススタディとしてサンテミリオンのシャトー・クーテットを調査対象地として定めた。2019年1月には台湾を対象とする茶業調査を実施し、新竹などの茶業の実態について調査を展開した。2月にシンポジウム「テロワールと流通」を開催し、年度内に行われた調査の分析成果を報告するとともに、活発な議論がなされた。3月にはシャトー・クーテットの現地調査に入り、現地の実測調査、史料調査、ドローン調査を行うとともに、ボルドー大学中世史研究者のフレデリック・ブトゥル教授に本研究の意義と調査協力について快諾を得ることができた。また3月の調査では、ラインガウ地溝においてシャンパーニュと地質的特徴を同じくするロタリングア地域への調査の展開が確認できた。

2019年度には前年度末に実施したシャトー・クーテットの調査を図面化、史料整理を実施を進めていくとともに、日本の茶業に関する調査研究を展開させた。京田辺市における現地調査をケーススタディとしながら、茶業経営を行う企業である福寿園担当者を招待しての意見交換、議論を進めた。2020年2月にはシンポジウム「テロワールと文化」において同年度の調査成果を報告し、意見交換を行なった。ケーススタディにおける調査成果が徐々に蓄積し、ワインと茶の比較研究としての骨格を構築していくことができた。

2020年度、2021年度はコロナ禍により移動を伴う現地調査が断念されることになったが、オンライン等で可能な範囲の研究活動を展開した。2020年9月には東アジア環境史学会大会においてポスターセッション「テロワール研究」を立ち上げ、ボルドー大学のフレデリック・ブトゥル教授をコメンテーターにしたパネルディスカッションを実行することができた。2021年度には3回のオンライン中心の研究会を実施し、また2月に「若手研究セミナー」を京都で開催し、研究を深化することができた。また京都近郊和束町茶業集落および滋賀県のワイナリーの生産現場の調査を行い知見を深めることが出来た。また、国内におけるテロワールの現地調査として、九州における嬉野茶産地やワイン生産の現場の調査を実施することができ、国内外におけるテロワールの実態を把握することができた。

2022年度には、2022年9月にベルギー・アントワープ大学で実施されたヨーロッパ都市史協会 EAUH (Europe Association of Urban History) に参加し、ポスターセッションとして「テロワールと都市」を企画した。本研究の共同研究者である法政大学経済学部教授杉浦未樹をセッションリーダーとし、同氏が「French Wine Terroirs and Early Modern Dutch Markets」、上智大学史学科教授坂野正則が「Frontier character and viticulture in riverfront cities in Early Modern France: Saumur and Metz」、京都工芸繊維大学准教授赤松加寿江が「The Construction of Terroirs and Wine Producing Region in Champagne in the 18th-19th centuries」の報告を行った。コメンテーターにはカテーナ研究所のアドリアーナ・カテーナ氏、マイケル・サリュウ氏が参加し、充実したパネルディスカッションを実行することができた。2023年1月および2月にフランス・ロワールにおけるテロワール調査を実施し、オラトリオにおけるテロワールの構築を考察、分析することができた。2023年2月には瀬戸内海沿岸の福山市草戸千軒町、鞆の浦地区、竹原市、呉市に生業調査を実施し、テロワール研究の日本における展開を確認した。3月には九州鹿児島県、熊本県、福岡県におけるワインと茶業に関する調査を実施した。コロナ禍で実行できなかった海外調査のかわりに、テロワールをより広い視角で捉えつつ日本における調査研究を展開することができた。

以上、本研究の成果は2023年5月に書籍化され赤松加寿江・中川理編著『テロワール：ワインとお茶をめぐる歴史・空間・流通』（昭和堂、2023年）を通じて広く発信することができた。

#### 4．研究成果

### (1)テロワールが抱える現代的課題指摘

テロワール概念は 20 世紀初頭から大きく変化を遂げてきたものであり、現代の公的定義でも指摘される通り、土壌的特質だけではなく人的な集団的経験知や歴史や文化的特質が含まれることが明らかになった。特に本研究を通してテロワールの形成には、都市による評価や消費文化が必須であることが確認できたことは都市史研究における重要な成果である。テロワールと地理的表示との違い、人新世とテロワールの成熟の共時性など、本研究に包摂される多様な歴史的、社会的課題を整理、指摘することができた。

### (2)テロワール概念の整理

中世フランスにはじまる「テロワール」の言葉の意味を整理し、クリマやクリュといった隣接する概念との相違、現代的語義についても明らかにすることができた。

### (3)近世におけるテロワールの変化

近世フランスにおいて、ガストロノミーを始めとする食文化の変容とともに、テロワール概念も変化を遂げていったことが明らかになった。特にガストロノミー地図が作成されていく時代において、地域産品と都市が評価されていく上で、都市的な価値評価軸がテロワールの形成において極めて重要であることが解明された。

### (4)近世イタリアの原産地呼称法とテロワールの相違

テロワールを形成したフランスだけでなく、18 世紀に原産地呼称の法令を発布したイタリア・トスカーナにおいて、テロワールはどのように認識され、構築されたのか。トスカーナのカルミニャーノを対象にテロワールの形成を解明した。その結果、フランスのみならず、イタリアにおいても「大きなテロワール」としての産地形成がなされていたこと、それがアカデミーの言説や都市文化が介入する農村地域としての文化的優位性が背景になったことが明らかになった。

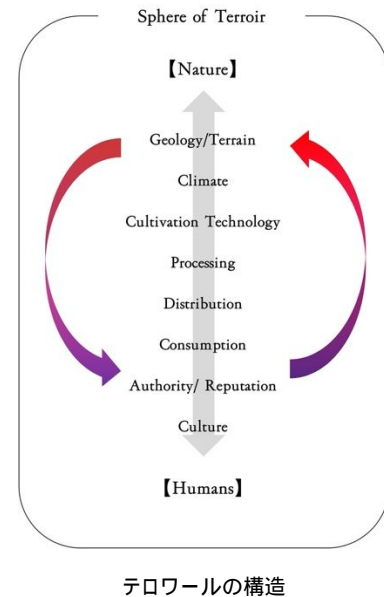
### (5)サンテミリオンのシャトー・クーテットの空間的特質

シャトー・クーテットは 16 世紀からワイン生産をしてきたワイン醸造家であり、18 世紀に遡る建築群が存在する。その敷地と建築の空間的、地理的特徴を明らかにすることができた。土壌特性に即して適したぶどう品種を栽培していることだけではなく、石灰岩採石場や水路システムの存在、さらに古代ローマに由来する植物、道路が存在していることがわかり、空間的な多様性、および生物多様性がこの土地の継続的なワイン生業を支えていることを確認することができた。

### (6)シャトー・クーテットのダヴィット・ポーリュエ家と地域社会の実態解明

シャトー・クーテットを経営するダヴィット・ポーリュエ家の不動産売買、ワイン販売、企業業績などに関する膨大な史料を整理することによって、同家のワイン事業の変化と地域社会における役割を解明することができた。特に、そのワインの味や評価に関する変化を、同時代のワイン評価の記録と結びつけることによって、時代によって変化するテロワールを確認することができた。

### (7)シャンパーニュの産地形成とテロワール



18,19世紀シャンパーニュを対象として、産地形成とテロワールの結びつきについて検討した。その結果、異なる二つのワイン産地の統合として現在のシャンパーニュが生まれたこと、その背景には発泡性ワインのシャンパーニュを安定供給するために生まれたメゾンとカーヴが土地の特性に左右されていたこと、移住者の海外進出気質がシャンパーニュの世界展開に関与していたことを指摘することができた。そこには畑区画スケールの小さなテロワールだけでなく、地域スケールの大きなテロワールを理解することの意味が明らかになった。

#### (8)宇治茶のテロワール

ヨーロッパのワインとアジアの茶を対象とした本比較研究において、茶にもテロワールが見出せることが明らかになった。特に宇治茶生産では、荒茶の段階でも栽培地を複数に分散させることで適当な土壌と日照量と生産時期を生産者がコントロールしていることを具体的なケーススタディを通じて明らかにした。

#### (9)台湾茶のテロワール

台湾茶においては、茶の世界市場の動向に大きく左右される銘柄の変化や台湾総督府による補助政策などによって茶業の仕組みや体制が大きく変ることが確認できた。すなわち、統治の変化、流通体系の変容、消費嗜好に応じて、常に茶生産は生産者や仲介者によってその生産体制が変わっていったのだが、一方で個々の茶生産者においては、テロワールと認められる独立した生産のあり方が維持されていることが確認できた。

#### (10)世界市場における日本茶のテロワールとブランディング

明治から昭和における国際市場において、日本茶輸出はどのようなブランディングを戦略的に行なっていたかをテロワールの構築という観点から明らかにした。輸出をやめ国内市場に専念した宇治茶とは異なり、日本の茶生産地では国際市場のニーズに応じて茶の形態(ぐり茶など)を変化させ、そこには人的なテロワールが形成されてきたことが明らかとなった。その背景には消費地における嗜好の変化傾向を生産者が知る契機を得ることにより、具体的な茶のテロワールとブランディングが可能になったことを歴史的資料から明らかにすることができた。

#### <引用文献>

・赤松加寿江・中川理編著『テロワール：ワインとお茶をめぐる歴史・空間・流通』（昭和堂、2023年）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 赤松加寿江	4. 巻 第43回
2. 論文標題 テロワールからみた都の領域史研究：京都とパリ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿島学術振興財団年報	6. 最初と最後の頁 254-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂野 正則	4. 巻 第5号
2. 論文標題 近世フランスの植民都市とカリブ海域：アンティル諸島とミシシッピ・デルタをつなぐ「都市と領域」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 都市史研究	6. 最初と最後の頁 76-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤松加寿江	4. 巻 1
2. 論文標題 近代トリノの食と空間－建築、都市から領域へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小野芳朗、岩本馨編『食がデザインする都市空間』昭和堂	6. 最初と最後の頁 81-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤松加寿江	4. 巻 2018年4月号
2. 論文標題 都市の色に気づく場所：ヴェローナのポッテガ・デル・ヴィーニ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会『建築雑誌』	6. 最初と最後の頁 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤松加寿江	4. 巻 1
2. 論文標題 フランスのぶどう：テロワールの原型と拡張	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 テロワールの空間	6. 最初と最後の頁 5-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島智章	4. 巻 1
2. 論文標題 ヨーロッパにおける坑道掘削技術の一側面：中近世ワロニー地域の坑道排水技術の発展	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 テロワールの空間	6. 最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上杉和央	4. 巻 1
2. 論文標題 京都の竹：土壌と加工のテロワール：京都府南部の概観	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 テロワールの空間	6. 最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸泰子	4. 巻 1
2. 論文標題 京都の竹：土壌と加工のテロワール：近世京都の竹・筍/筍生産の現状についての調査報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 テロワールの空間	6. 最初と最後の頁 30-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂野正則	4. 巻 1
2. 論文標題 移動性文化の産物としてのシャンパーニュ・ワイン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 テロワールの空間	6. 最初と最後の頁 36-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤玄	4. 巻 1
2. 論文標題 クリマ概念の構築の中世的諸前提	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 テロワールの空間	6. 最初と最後の頁 42-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤松加寿江	4. 巻 2018年4月号
2. 論文標題 都市の色に気づく場所：ヴェローナのポッテガ・デル・ヴィーニ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村啓介	4. 巻 128号
2. 論文標題 近代フランス・ボルドー地方におけるワイン格付思想と商人論理 「クリュ」概念の史的展開を手がかりに	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史 (東北史学会)	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 7件）

1. 発表者名 OTA Shoichi
2. 発表標題 Landscape of tea production in Taiwan
3. 学会等名 東アジア環境史学会大会「新しいアプローチとしてのテロワール：20世紀東アジアにおける茶」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 SUGIURA Miki
2. 発表標題 Japan's Rivalry with the Soviet's 'Scientific' and China's 'Extensive' Tea Terroirs, c.1920-1960
3. 学会等名 東アジア環境史学会大会「新しいアプローチとしてのテロワール：20世紀東アジアにおける茶」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 UESUGI Kazuhiro, KISHI Yasuko
2. 発表標題 The production and plantation geography of Uji tea,
3. 学会等名 東アジア環境史学会大会「新しいアプローチとしてのテロワール：20世紀東アジアにおける茶」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 AKAMATSU Kazue
2. 発表標題 Terroir as a new Approach: Tea in East Asia in the Twentieth Century, Kyoto University
3. 学会等名 東アジア環境史学会大会「新しいアプローチとしてのテロワール：20世紀東アジアにおける茶」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Miki Sugiura
2. 発表標題 French Wine Terroirs and Early Modern Dutch Markets
3. 学会等名 EAUH (Europe Association of Urban History) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masanori Sakano
2. 発表標題 Frontier character and viticulture in riverfront cities in Early Modern France: Saumur and Metz
3. 学会等名 EAUH (Europe Association of Urban History) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazue Akamatsu
2. 発表標題 The Construction of Terroirs and Wine Producing Region in Champagne in the 18th-19th centuries
3. 学会等名 EAUH (Europe Association of Urban History) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 野村 啓介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 242
3. 書名 ヨーロッパワイン文化史 - 銘醸地フランスの歴史を中心に	

1. 著者名 赤松加寿江、中川理、加藤玄、坂野正則、野村啓介、小島見和、中島智章、上杉和央、大田省一、杉浦未樹	4. 発行年 2023年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 328
3. 書名 テロワール: ワインと茶をめぐる歴史・空間・流通	

〔産業財産権〕

〔その他〕

都市テロワール研究会 <a href="https://sites.google.com/view/research-of-terroir-studies">https://sites.google.com/view/research-of-terroir-studies</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	赤松 加寿江 (Akamatsu Kazue) (10532872)	京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授  (14303)	
研究分担者	加藤 玄 (Kato Makoto) (00431883)	日本女子大学・文学部・教授  (32670)	
研究分担者	野村 啓介 (Nomura Keisuke) (00305103)	二松學舎大学・文学部・教授  (32664)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 毅  (Ito Takeshi)  (20168355)	青山学院大学・総合文化政策学部・客員教授   (32601)	
研究分担者	杉浦 未樹  (Sugiura Miki)  (30438783)	法政大学・経済学部・教授   (32675)	
研究分担者	大田 省一  (Ota Syoichi)  (60343117)	京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授   (14303)	
研究分担者	岸 泰子  (Kishi Yasuko)  (60378817)	京都府立大学・文学部・准教授   (24302)	
研究分担者	上杉 和央  (Uesugi Kazuhiro)  (70379030)	京都府立大学・文学部・准教授   (24302)	
研究分担者	中島 智章  (Nakajima Tomoaki)  (80348862)	工学院大学・建築学部（公私立大学の部局等）・教授   (32613)	
研究分担者	坂野 正則  (Sakano Masanori)  (90613406)	上智大学・文学部・教授   (32621)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------